

「ハレとケ」 通信

第3号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築 (3)

琴平グランドホテル【後編】

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた 【傘かしげ／江戸しぐさ】

花ある数寄屋 (3) 「下地窓」

中津万象園「花の歳時記」(3) キシヨウブ、ヒツジグサ

かさねの色 (3) 「蝉の羽」

平成21年6月発行

表紙写真：昨年の「まんのう町ひまわりまつり」で。
当社社員もバンド演奏に参加しました。

「琴平グランドホテル (後編)」

近兼会長の語る、「旅館人生」。

それを豊かに彩っているのが、様々なひととの『縁』『出会い』です。

今回の「物語のある建築」では、琴平グランドホテルにまつわる

素敵な出会いの物語を、お届け致します。

(株)琴平グランドホテル

代表取締役会長 近兼孝休氏

瀬戸大橋の開通により、絶対にお客さまが来る……そう信じて次の旅館の計画に着手、いよいよ土地の買収にかかりました。昭和六十一年のことです。

旅館の建設予定地は、その当時、十三件ほどの所有者に分かれていました。その中には四国電気工事さんの土地もあった。『建設工事の際にはあなたのところを使わせてもらうから……』と言って買収に応じていただいたりもしました。

とはいえ、設計事務所も富士建設さんも、いったい何をどうすればいいのか、本当に一から始めなければいけない。香川県の西の方で、こんなに大きな工事をしたことがなかったからです。にもかかわらず、瀬戸大橋の開通の日が迫ってくる。開通に間に合わなければ、建築する

意味がない。ホテルを建てながら、土地の買収も進めていくという、無謀なこともしました。

こうして完成したのが、現在の紅梅亭です。この地下工事が、また大変だった。地下工事を担当した土木会社が、「あの工事のおかげでうちはえらい損をしたワ〜」と言っていたくらい、ゴロゴロと石ころの土地だったのです。また、当時としてはこんな大規模な工事は珍しかったので、富士建設さんは京都の大学へ行き、構造計算の確認をするほどの念の入れようでした。だから、金額を決めるのも大変で、どのくらいの費用がかかるのか、誰も見当もつかない……。

実は、今の和食処の下辺りには、バスが通れるほどの地下通路があるんですよ。結局使う必要はなくなったのですが、当初、駐車場が確保できず、そういうふう

に誘導するしかなかったのです。しかし、

買収が進み、駐車場のめどもつき、庭のスペースも取れることが分かってきた。そうなると思う、プールを作りたくなった。「どこかで余ったプールはないか？ 予定していたけど取りやめたとか、そういうものが……」と設計事務所にプール探しを依頼し、見つけてきました。このプールの

お陰で、夏には子どもたちに喜んでもらっています。プールのあるホテル自体が、あの頃はありませんでしたからね。

そんな紅梅亭の新築工事ですが、これほどの大規模な工事は近所さんだっ

て初めてですから、騒音、電波障害などの苦情ももちろんありました。用地買収だ

って、自分が乗り出して行って、交渉を行いました。ちよつと驚くくらいの金額の案件もありましたが、私にとっては、お客さまの喜んでくださる姿を夢見る楽しい日々でもありました。

そして昭和六十三年二月十八日、ついに紅梅亭がオープン。たくさんのお客さまがお越しくださいました。でも、今度

は従業員が足りない。そこで私自身あちこち人集めに奔走して、社員育成の勉強をしながら、皆で建物にふさわしい「人間力」を高めようと意気込んでいました。余談ですが、そうして成長した社員が、

他のホテルへ引き抜かれていったこともあり

ました。

色々と大変なこともありましたが、ひとつに若さもあり、夢と希望があった。だから、苦労なんて、そんなに問題ではなかったと思います。

瀬戸大橋開通のその年は、ずいぶんと利益も上がりました。しかし、誤算は、数年は続くと思っていた「橋」の好景気が、一年しか続かなかったこと。その頃、大手旅行会社から依頼を受けて行った講演でも、「桃栗三年橋一年」と自身を戒めながら言ったほどです。その言い回しを面白いと言って、「私も使ってもいいかね？」と電話してきた人もいたりしました。本当に、人の興味はすぐに冷めます。流行を追って仕事することは、こわいことですね。先の先を考えていかないと。

富士建設の真鍋さんを始め、長年の旅館経営の中で、実に色々な人との出会いという財産を得ました。

たとえば、こんぴらといえは「歌舞伎」ですが、これも今年で二十五年になります。この出会いは、昭和五九年。「素晴らしき仲間達」という番組の録画で、中村吉右衛門さん・勘九郎さん、澤村藤十郎さんが、金丸座にいらっしやいました。



金丸座を見て、「すごいなあ」と三名のかが興奮した。そして、当ホテルに宿泊し、「御主人はいないか?」と。私が部屋へまゐりますと、早速、「あの歌舞伎小屋で芝居をやりたい。」と言うわけです。「そんなことはできないでしょう。重要文化財ですし…」と私は答えましたが、三人の方は、「いや、絶対にできる!」と信じている。そのまま、その夜は一時頃まで歌舞伎談義です。私はもっぱら聞き役でしたけれど…。

その頃、歌舞伎界もこんぴら観光界もちょうど、不況の波に吞まれていました。そんな中で、「ここで芝居をやりたい」という夢が膨らんでくる。実に楽しい夢です。「じゃあ、いったいどのくらいのお客さまを集められるのですか?」と聞くと、さすが実力のあるお三方だけあって、後援会だけでも、かなりの数字が見込めそうですね。「じゃあ、その人達を琴平に宿泊させてくれますか?」と言ったら、「もちろんです。」とおっしゃる。それならば…と大手旅行社へ企画を持ち込みましたが、「あんな小屋で芝居がやれるわけがない。人が集まるわけがない。」と受け入れてもらえません。あきらめずに何度も足を運んで何とか話を受けてもらい、重要文化財ゆえの関係箇所との難交渉も

乗り越えて、実現に至ったのが、昭和六十年のことです。

紅梅亭には「勘三郎部屋」と名付けた部屋もあるんですよ。「ああ、泊まりたいなあ、見たいなあ…」と先代の勘三郎さんが完成を楽しみにしながら実現できなかった部屋です。第三回の出演の時に、別の所用で私が留守にしていると、「あれ、今日は御主人いないの?」と寂しがってくださる。私の方も気になって出先からトンボ帰りして…。この出会いも、縁ですね。その他、漫画家の手塚治虫さんたちを招いて町興しのイベントを行ったりもしましたし、本当に様々なことのあった旅館人生でした。面白いこともずいぶんありました。ケンカしながらも、今も親しく行き来する大事な仲間もたくさん出来ました。それも結局は、富士建設との出会いがあったから、と思っています。

真鍋さんとの思い出もたくさんあります。たとえば、五重塔(注:「ハレとケ通信(1)」をご覧ください)に賭けていた時のことも、良く覚えています。もう、目の色が違っていましたね。そのころ、「真鍋さん、五重塔もええけど、琴平であなたは他にもたくさん建物を建てたじゃないですか。その人達をもっと取り込んで、富士建設をPRしてくれる人と

して大切にフォローしなきゃあ、ダメなんじゃないですか?」って何度も言いましたけど、「ああ!」と相変わらずぶっきらぼうな答えが返ってくるばかりで、「ワシ、高知行かないかんし、忙しいんじや!」と言うくらい打ち込んでいました。私共に関しても、社員のための母子寮や添乗員用のホテル、私の自宅や息子の家など、たくさんお世話になりました。自宅などの場合には、「二階建てにしたい」と相談したところ、「バカなことを言うんじゃない。平屋にせえ!」と言われたり…。そんなことも、ありました。

旅館人生を彩る、多くの出会い。

遡ればさりがありませんが、私たちの世代には、そういうふうに、人との出会いや義理を大切に思う気持ちが染みこんでいるのです。(了 ※次ページへ)

『プロが選んだ旅館・ホテル100選』、「2008年度人気温泉旅館ホテル250選」などさまざまな部門で毎年入賞をしている【紅梅亭】、【桜の抄】の両館。温泉、宿泊はもちろん、紅梅亭での「美食の会」も、季節感溢れる心づくしのお料理が並びます。会長夫妻、そしてスタッフの皆さまが工夫と気遣いを重ね、まさに「手塩にかけて」育てられたこの旅館で、気持ちの良い特別な時間をお楽しみくださいませ。(真鍋)

『琴平グランドホテル』との出会い、そして思い出

——当社社員からの【感謝状】 尾崎 伸司（富士建設（株）取締役工務部長）——

私が近兼前社長（現会長）と最初にお会いしたのは、昭和五十五年。今の【桜の抄】の南館増築工事の時でした。

以来、独身寮、紅梅亭、桜の抄改装（その1・その2）、社長宅、紅梅亭露天風呂、桜の抄増築改築…と、大小物件合わせれば十五件以上のお付き合いをさせて頂いています。延べ日数を年に換算すれば、4～5年間くらい琴平にいたことになるのでしょうか。その間、社長、奥さま（副社長）、支配人、経理部長、ご子息である現社長、管理部長…と、関係各所の皆さまとの付き合いも広がり、現在に至っています。

今まで本当にお世話になり、また、ご迷惑もおかけしました。ただ、とりわけ現場監理として直に携わっていたときに

は、私にとつては大変勉強になりましたし、色々な経験もさせて頂いた…、という思いがします。

なかでも特に印象に残っているのが、桜の抄の増築工事と紅梅亭の建築であります。その思い出をちよつと振り返ってみましょうか。

桜の抄増築工事の着工までの経緯は前回の「物語のある建築」に掲載されていますが、初めて現場に行ったときには、どこからどう手を付ければいいのか見当もつかない…というのが本音でした。というのも当時の私は入社して6年目の二十八歳。このような大きな現場に携わるには知識も経験も浅かったからです。

また、現状の建物からでも想像がつくと思いますが、敷地は急斜面。建物も三方は敷地内いっぱいに建ちますし、材料の搬入・搬出、仮設足場、荷揚げ等、非常に苦労しました。当時は仮設重機、仮設材、設備機器も今ほど技術も進んでおらず、仮設計画に大変悩んだことを覚えています。私たちが現場事務所として使用する仮設事務所のための適当な場所もなく、既設本館の軒下に吊つて建てたほ

どです。しかもそこへ行くのも、前面道路から直接は行けない。大回りして裏から入っていくのですが、協力業者や営業担当の人たちと打ち合わせをしたいと思つても、最初は道順が分からないんですよ。目の前に現場事務所が見えているのに、皆さん、たどり着けない。そのたびに道順を教えていたのも、懐かしい。

悩みながらもなんとか基礎工事、躯体、仕上工事と進んで行き…。途中もやはり色々な難題がありましたが、施主である琴平グランドホテルさん、設計事務所、当社の上司と相談をしながら乗り越えていきました。時には施工順序や工法も変えねばなりませんでしたが、近隣の方々にも多大なご迷惑をおかけしたと思っています。

それでも昭和五十七年三月には、お客さまが宿泊のために入ってくる。その迫ってくるプレッシャーを抱えながら、なんとか竣工の日を迎えることができたのです。そういった辛い苦労もあっただけに完成したときの喜びはひとしおで、この経験が若かった当時の私の自信にもなりましたし、その後の現場監理の大きな

礎にもなったと感じています。

この桜の抄の現場から始まり、昭和六十一年の紅梅亭へ続き、そして現在に至っている…。今思えば、私の現場監理経験十三年のうち、約3分の1を琴平グランドホテルさんの現場で過ごさせていただいているのですね。また、最後に現場責任者として直に関わったのも、紅梅亭の現場でした。

現在まで、約三十年のお付き合い。これからも末永くお付き合いをお願い致しますと共に、これまでの感謝の思いを込めて、御礼とさせて頂いたきます。



昭和63年ごろの富士建設の社員たち。2段目右より2人目が、尾崎。



「福崎課長が初めて琴平グランドホテルさんの現場に携わったのって、いつでしたっけ？」

紅梅亭の、風呂の改修の2回目のときかな。

石井設計（日本における旅館等デザインの第一人者）さんが、はじめて紅梅亭のデザインに係わるようになったところで、6〜7年前、三〇歳の時。

「印象に残っている」として、ありますか？

現場が完成しかけたころのこと。社長（現会長）に、犬走りもついでに打ってくれ、と頼まれた際、「工事範囲外で含まれていません、できません！」と答えて、ものすごく怒られたこと（笑）。「おまえ、帰れ！」と言われてショックだった。でも、その工事は、琴平グランドホテルさんの社長の立場で考えればすべきことで、最後は「ありがとう」と声をかけてくださって、本当に嬉しかったなあ。

「その他に、印象に残っていることは？」

会長はとにかく、現場へしょっちゅう来てくれます。工事中もずうっと見に来てくれていて、オープンから逆算した工程も頭に入っている。なので、節目節目で、「おい、工程大丈夫か？」と聞いてくださる。突貫工事の工期の最初のうちは、私も「バッチリです！」と答えるんだけど、進むに連れて、ちよつと不安になってくる。なので、その返事も、「バッチリです！」から、「出来ますワ。」「がんばります。」へ変わっていく。（笑）そうしたら、会長が、「ほんまにだいじょうぶか？」と。私やって、「富士建設がでんかつだった。」って言われるの悔しいけん、頑張るわなア。会長も日頃は厳しいけど、そうやってきちんとこなせば、「ありがとう。助かったわ。」とねぎらいの言葉をかけてくれるし。

会長のすごいところは、その労りを職人さんたちにまで向けてくれること。突貫の時にはおにぎりを差し入れて宴会場で食べさせてくれたり。

それに、私みたいな一社員と二人で、気さくに飯を食ってくれるのも凄い。あんなにカリスマ性がある素晴らしい経営者なのに、私に「おい、飯でも食わんか。」と誘ってくれる。これは、やっぱり感動しますよ！

「だから、福崎課長も琴平グランドホテルさんには特別愛着があるんですね。」

これはどのお客さまでも同じやけど、やっぱり、うちの会社のこと、私のことを、好きになって「ええなあ」と思ってくれたら嬉しいな。

「最後に琴平グランドホテルさんの現場を通して教えてもらったことって、ありますか？」

それは、「お客さまに対する接し方、姿勢」かな。最初に言った、「犬走りで怒られた件」もそうやけど、ほんまに相手のことを考えられるようになれば、うちのほうから提案ができるようになる。そうしたら喜んでもらえるし、そのことでどんどん互いの愛着も増してくる。宿泊するお客さまのために、『どうすればより快適に過ごして貰えるか？』を常に考えて、ホテル、旅館の枠を超えて色んな提案をしようとしている琴平グランドホテルさんの姿勢を見たら、それを感じるな。

あと、工程の管理も、同じ。たとえば足場がかかっていたり、工事の箇所があるときは、そのことをきちんとお客さまに通知して、迷惑を掛けないように先回り先回りして段取りをしておかないといけない。常に頭の中に「お客さまに対してどういう気遣いをしなければいけないか。」を持つことの大切さは、この工事を通じて学んだと思う。

『琴平グランドホテル』さんから、お客さまへの心づかいを教わりました。

——当社社員からの【感謝状】

福崎 正道（富士建設㈱工務部建築課課長）

——

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(3)【江戸しぐさ】

衣替えの季節が近づいてきました。

学校などでは、六月一日から夏服に替わり、涼しげな雰囲気。日本の着物文化では、四月には綿入れから袷、六月には単衣に、と厳密に季節ごとに着る服が決まっていました。最近では、気温の変化に合わせて着る物を替えることが多く、季節ごとという風習は薄れてきているように感じます。

さて、六月と言えば梅雨の季節です。

皆さん『梅雨』と聞いてどのようなイメージを持たれますか？「雨が続いて洗濯物に困る。」「お天気が悪いと気分も憂鬱になってしまふ。」「という方もたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。

そんな気分が暗くなってしまうがちなこの季節を、さわやかに過ごせるようなお話を探してみました。

― 傘かしげ ― 江戸しぐさ

雨の日、傘をさしながら狭い路地をすれ違う時、傘同士がぶつかってしまうことがあると思います。そのような時、お互いに相手とは反対側に、少しだけ傘を

かしげて、ぶつからないようにします。

これは「傘かしげ」と呼ばれる江戸町民のマナー、「江戸しぐさ」の一つで、庶民が傘を差すようになった、約二百年前に生まれたものです。お互いの体に雨のしずくがかからないようにするとともに、ぶつかって傘を破らないようにする実利的な意味も含んでいたようです。

そもそも「江戸しぐさ」とは、言葉も習慣も異なる人々が暮らす百万都市であった江戸で、トラブルを未然に防ぎ、日々を気持ちよく過ごすために將軍家御用達の大手商人や町衆たちによって考え出されたものです。そういったわけで、「商人（あきんど）しぐさ」とも呼ばれます。

商人たちが商売をするうえで支障をきたさないように、いろいろな知恵を絞り、工夫して築き上げた、人間関係を円滑にするためのノウハウ、生き方、いわば商人道のことを「江戸しぐさ」と呼ぶようになったようです。主には目つきや表情話し方や身のこなしによって、思い（心）を表現しようというものだったようです。

＊ ＊ 江戸しぐさ ＊ ＊

● うかつあやまり・・・

△こみの往来などで足を踏まれたときに「踏んだほうは言ってもなく 踏まれたほうも」「ちうこそ うっかりしていません」といって謝ること。

● 七三歩きのしぐさ・・・

道のど真ん中を歩くのではなく、道路の七分めは八道とし、自分の道は三分めとする考え方。こうして道をあけておくことで、いざという時に「けが人を肩板で運ぶ人も、急ぎの人も気兼ねなしで往来できる」というもの。

● 見て見ぬふり・・・

道端などで人が倒れていた時に、すぐには手を貸さず、いったんは見ないふりで状況をうかがうこと。相手の自主性と尊厳を傷つけることがないよう、本心に動けないと見きわめてから、初めて手をさしのべる。



傘かしげ

「見て見ぬふり」と聞くと良いイメージが湧きませんが、江戸での見て見ぬふりには深い思いやりがあったようです。このようにいろいろなしぐさがあります。が、現代でも通用するものはいくつもあります。

人間関係を円滑に、楽しく暮らしていくために、ぜひ活用してみてください。

(文・イラスト / 土岐倫子)

花ある数寄屋（3）

わたしたちが提案したいのは、依頼主の美学を反映した空間。
品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、
数寄屋の魅力を紹介します。

「下地窓」



↑光の透けるさまがこころ休まる「下地窓」の景色。



掛け障子より光が差し込む。
ほんのりと花が浮かび上がるようで美しい。→

下地窓とは、本来、壁を塗り残し、下地の見える窓のこと。
古くより茶室で多く用いられた窓で、「助枝窓」とも書き、「塗り残し窓」「掻きざし窓」などとも呼ばれます。

また、その誕生には、『千利休が荒れ果てた茅屋の壁を見て使用を思いついた』という逸話もあり、風雅を表現する手法として、現代まで様々な建築家による多くの例が残されています。

皮付き藁や竹を格子状に編み、藤蔓を絡ませて意匠的に仕上げた窓から差し込む光は、端正で美しい影を落とし、特に薄暗い茶室の壁に趣向を凝らして位置を決め、開けられた下地窓は、あかたもスポットライトで照らしたような鋭い効果を生み出します。
窓の形も新月窓、丸窓、平隅切り窓、櫛形窓、火燈窓、欠円窓などさまざまあり、光の分量、影の様子をイメージしつつ、デザインや位置を決定していきます。

そして、内側には「掛け障子」を。下地窓以外にも、視線を遮ったり、独立した空間として強調するためにも、「掛け障子」は活躍します。

今はなかなか小舞を組んで壁を塗る、ということが少ないですが、から、「下地を塗り残した窓」とは言い難いかもしれませんが、現代的な技術によって施工された建物でも、同じような意匠の窓をつくることは可能です。従来通りの使い方はもちろん、たとえば、間接照明として、下地窓越しに光が差し込む、というデザインを考えても素敵かもしれません。

自分なりの個性を反映させ、こころ休まる「明かり」とりとして、和室、玄関などに、下地窓の意匠を取り入れてみませんか？

「花の歳時記 (3) キシヨウブ ヒツジグサ」

畫家の新緑に映える「夕映えの島」月の島」周辺の湖水には、ギリシヤ神話に出てくる水の精ニンファ (Nympha) を学名

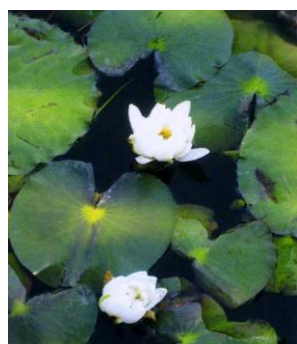
に持つスイレンの仲間、唯一日本に自生しているヒツジグサが白い綿帽子のように水面に浮かんでいます。

一方湖畔には、これまたギリシヤ神話に出てくる女神イリス (iris) を学名に持つアヤメの自生種キシヨウブが黄色い花を咲かせ、薄くて幅広い花弁を天女の衣のように薫風に泳がせながら、ヒツジグサ

に何か呼びかけているような気がします。

共にギリシヤ神話にゆかりのあるこの両者がこの地、旧京極家の別邸「中津万象園」で爽やかな初夏の陽射しを謳歌している。この結びつきは決して偶然ではないような気がしてなりません。

(長岡 公)



＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞

瀬戸中央道路

坂出北ICより約 8.5km／約 15 分

坂出ICより約 14km／約 20 分

高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分

【長岡 公 氏】

昭和2年10月 香川県丸亀市津森町に生まれる。

昭和26年3月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業

昭和26年4月以降

香川県高率高等学校教員として主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校・飯山高等学校教頭

昭和63年3月 定年退職 香川西高等学校教頭

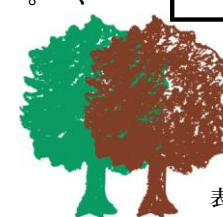
現在 (財) 中津万象園保勝会 理事

※主な著書に「讃岐の名園紀行」(栗林 玉藻編／中・西讃編)がある。

「蝉の羽」

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色 (3)



表：檜皮色／裏：青
着用時期は夏。

動物 (昆虫) をモチーフにした
季節感溢れる珍しい色目。

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういったものの結晶とも言える「重色目 (かさねいろめ)」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

【編集後記】

今回も、前回に引き続き「翠平グラインドホテル」さまの「物語のある建築」をお届け致します。

よく「夢を持つている」「夢がある」という表現をします。また、アスリートのインタビューなどでは、「夢とは実現するためのもの」という表現をよく聞きます。でも「夢」つて…憧れ、願望、空想、妄想、理想、ビジョン…すべて「夢」と同じもののよう、似て非なるもののような。色々と考え始めると「夢」自体の定義が分からなくなるほどです。

ただ、「自分のみる『夢』の対象に、何を選ぶのか？どんな夢を描き、愛着し、そのためにどんなステップを刻むのか？」ということには、自身がこれまで見、感じ、学び、考え、試行錯誤してきたこと、そして大切に守り愛おしみ、育んできたもの…そういったものの全てが、現れてしまうような気がします。

そう思うと、心して「夢」をみなければ…と思います。

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



建設業許可：香川県知事許可(特18)第189号
／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号
／宅地建物取引業免許：香川県知事登録 (10)第1997号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101

三豊市詫間町詫間 300 番地 1

TEL0875-83-2588(0120-832589)

FAX0875-83-5864

http://www.fujikensetsu.jp

mail y-manabe@fujikensetsu.jp (真鍋有紀子)

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、

「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物を

はじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。

また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に

対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復

維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭